第三者意見

足達 英一郎
（あだち えいいちろう）
（株）日本総合研究所
上席主任研究員

社会的責任投資のための企業情報の提供を金融機関に行っている立場から、本書を通じて理解したアサヒビールグループのCSR（企業の社会的責任）活動ならびにその情報開示のあり方に関し、第三者意見を以下に提出します。

酒類事業とりわけ、ビール類においては、出荷数量の拡大、市場シェアの拡大が競争戦略として重視されています。新ブランドを次々に投入し、販売促進・広告活動に注力することが戦略の定石とされてきました。ただ、国内の人口減少が確実に進展していくなかで、戦略と現実のギャップ拡大がCSRの視点からのリスクを顕在化させることを懸念いたします。競争戦略もしくはマーケティング戦略とCSRとの関係について所見を伺わせてください。

CSR=CS（お客様満足）+R（交流）という独自の定義は明快です。ただし、この本意は「お客様に対応するがごとく、さまざまなステークホルダーの声に耳を傾ける」という姿勢を示すものであると理解しました。その観点からは、具体的なステークホルダーの像やその期待の整理に課題が残ると判断します。例えば、地域の商店街に古くからある酒販店とどう共存共栄を図るのかや、年間に700件を超える飲酒運転を原因とする交通死亡事故の関係者に対して果たせる責任はないかといったレベルで、届けられた声と取り組みの内容を具体的に報告してください。

同時に、例えば「びんビールと缶ビールは、どちらか環境負荷が小さいのか」といった消費者の素朴な疑問にも見解を示すなどして、ステークホルダーの成熟した行動や判断をリードする姿勢を示されることにも期待します。

第82期の有価証券報告書には、「事業等のリスク」として「食品の安全性について」や「環境に関するリスクについて」などがあげられています。CSR報告書でも、こうした文脈で、リスクの具体的な特定、リスク回避のための取り組みの実態、残された課題を重点的に報告して、重層的な情報開示を実現してください。

飲料、食品・薬品の事業領域の拡大を進めておられます。仮にCSR=CS（お客様満足）+R（交流）という考え方は共通であったとしても、具体的な取り組みの内容は、事業領域によって多様性があるものと考えます。例えば、乳幼児用薬粧品・食品事業のCSRは、酒類事業のCSRとは内容を異にするものと考えますし、CSRの観点から新たな事業機会を獲得しやすい事業領域でもあります。事業領域別に特色ある側面については、積極的に子会社、関連会社の事例を報告してください。

ビール・発泡酒に関して希望小売価格を定めず、小売業者などに販売価格をまかせる新取引制度（オープン価格）については、昨年度のCSR報告書において導入の事実が報告されているところですが、本報告書において、1年以上の実績にもとづいて、関連するステークホルダーそれぞれにどのようなメリットが生まれたかの言及がなかったのは残念でした。「成果の検証」や「改善」といった視点を大切にするとともに、それを積極的に情報開示する姿勢を強化してください。

バイオマスエタノール・プロジェクトに関する特集記事は興味深く拝見しました。「環境を基軸に研究を進める」というミッションを有する「技術開発研究所」の活動成果を、今後もレギュラーで報告してください。あわせて、子会社、関連会社等が有する、社会的課題を捉えたイノベーション、事業革新に資する技術要素もあわせてひろく報告してください。

なお、このコメントは、本報告書が、一般に公正妥当と認められる環境報告書等の作成基準に準拠して正確に測定、算出され、かつ重要な事項が漏れなく表示されているかどうかについて判断した結論を表明するものではありません。

プロフィール

金融機関に対し社会的責任投資のための企業情報提供を担当。環境経営とCSRの視点からの産業調査、企業評価を専門とする。経済同友会社会的責任経営推進委員会ワーキンググループメンバー（02～04年度）、ISO/TMB社会的責任に関するワーキンググループエキスパート（現任）。共著に「CSR経営とSRI」、「SRI社会的責任投資入門」など。

編集後記

アサヒビールグループは、CSR活動に関する情報開示にあたり、従来から、冊子「アサヒビールグループCSRレポート」に加えて、Webサイトを活用し、誌面スペースの制約から掲載できない詳細かつ網羅的な情報提供に努めてきました。

2006年度版では、この考え方を踏襲しながら、Webサイトの情報を、より体系的にご覧いただけるよう、サイト設計を大幅に見直しました。また、冊子についても、社会的な関心が高いと思われる項目、2005年度に進展のあった取り組みを中心に報告するよう編集方針を見直しました。

こうした方針に基づき、本誌「アサヒビールグループCSRレポート2006」では、アサヒビールグループが推進するステークホルダーとの「R（リレーション＝交流・対話）」をもとにした新たな取り組みや成果をさまざまな角度からご報告しています。また、「技術で環境に貢献したい」という研究者の思いが起点となり、多くの皆様のご支援・ご協力に支えられて大きな進捗を果たしたプロジェクトを特集記事「アサヒビールの新たな挑戦／バイオマスエタノール・プロジェクト」として掲載しました。

こうした活動から、アサヒビールグループのCSRに対する考え方や活動の一端をご理解いただければ幸いです。読者の皆様からの忌憚のないご意見をお待ちしております。

アサヒビールグループCSR委員会事務局